テルミンのバストダウン大苦戦！

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テルミンのバストダウン大苦戦！

【Ｎコード】

Ｎ６１３０Ｊ

【作者名】

秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】

テルミンは今日もあのひとの理想のお嫁さんになるために奮闘！

揺れる爆乳！

音楽を聴きながら、学校の廊下を進む輝実（てるみ）は、スキップをしながら自慢の爆乳を揺らしていた。

イヤホンから漏れてくる曲は、エロゲーの主題歌。

輝実はきのう切ったばかりのショートヘアに触れる。

「ヒロ君気に入ってくれるかな」

幼いころからずっとロングヘア。腰よりも短くなったことはなかった。

こんな音楽だって最近聴きはじめたばかり。

きのうはついにキライだった納豆も食べられるようになった！

そう、すべては……。

瞳を丸くした輝実は廊下の角に隠れて、そ〜っと先にいる男子生徒たちを覗き見た。

男子生徒の会話が聞こえてくる。

「俺は断然巨乳派」

「Dカップくらいがちょうどいいだろ」

「おれはFカップくらいがいいな」

そして、裕和(ひろかず)が口を開く。

「オレは絶対になにがあろうと貧乳派だ！」

それに同意する男子。

「そうだよな、ちっちゃいほうがいいよな。ほら、手に収まるくらいがちょうどいいっていうか」

が、それは同意にはならなかった。

「なに言ってんだ？　手に収まるって膨らみがあるってことじゃないか。オレの言ってるのはAとかBとかじゃくて、ツルペタだ！！」

胸を張った裕和の声は中を響き渡った。

が～ん、ショック！

隠れてそれを聞いていた輝実はショックのあまり、廊下に両手両膝をついてしまった。

中学生になって、急成長をはじめた胸。最初は男子たちの視線が気になって、キライだった自分の胸。でもグラビアアイドルもマンガもアニメも、巨乳の女の子ばっかり。世の中の男子はみんな大きい胸が好きなんだ。

だから、これは神様が与えてくれた、唯一の長所！

そう信じて今までやって来た輝実だったのが……。

運命とは残酷である。

まさか恋い焦がれる裕和が超貧乳好きだったとは――。

「うわ～ん、神様のばかぁ！」

爆乳を揺らしながら輝実はその場から駆け出した。

そんな大きなリアクションをすれば、男子たちにも気づかれる。

「またテルミンいたぞ？」

と、顔を向けられた裕和は嫌そうな顔をした。

「だからなんだよ？」

「ありゃどう見てもお前にゾッコンだぜ？　付き合っちゃえよ？」

「タイプじゃねーよ」

少し顔を赤くして裕和はそっぽを向いた。

※※※

家に帰ってきてからも輝実はずっとベッドで泣いていた。

「ひっく……ひくっ……ヒロ君に嫌われちゃったよぉ。私のことキライなんだ、絶対にキライなんだ……うううっ」

トントン！

部屋をノックする音が聞こえた。

「輝実ーっ、いい加減に夕ご飯食べなさいよー！」

母の声。

「いらないって言ってるでしょ！」

泣きながら輝実は怒鳴った。

もうご飯なんてのどを通らない。

ご飯なんて食べたらまた胸が大きくなってしまう。

ドアの外から声が聞こえる。

「今夜は輝実の好きな唐揚げよ！」

鶏肉はバストアップに効果的とのウワサがある。

輝実は決意した。

「泣いてばっかりなんていられない。私はヒロ君の理想のお嫁さん

になるって決めたんだから。そのためだったら、唐揚げなんてもう食べない。ダイエットするって決めたんだから！」

こうして、輝実の過酷なダイエットが幕を開けたのだった。

※※※

――1週間後。

頬がくぼむほどゲッソリとした表情の輝実。

目の下には隈ができ、髪の毛はなんだかパサパサで、爪も割れてしまっている。なんだか全体的に潤いがない。

「ふふふっ、私はこの一週間、ありとあらゆるダイエットに挑戦し、体重も10キロ以上落とした。これでヒロ君の理想に一歩近づいけたハズ！」

下着姿の輝実はブラを外してバストを露わにさせた。

そして、念願の計測！

メジャーでアンダーとトップを計る。

また計る。

またまた計る。

またまた計る。

そして、もう一度念のために計る。

「ぎゃ〜〜〜〜っ！」

輝実の声が家中に木霊した。

「どうした輝実！」

叫び声を聞きつけて兄貴が部屋に飛び込んできた。

「変態！」

輝実は片腕で胸を隠し、もう片手でメジャーを兄貴に投げつけた。

「ぐへっ！」

顔面に直撃を食らった兄貴はよろめいた。

そんな兄貴に追撃のボディブローを食らわして、輝実はドアを閉めてカギもかけた。

ドアの向う側から呻き声が聞こえるが気にしない。

ぶっちゃけ、今の輝実には兄貴が死のうとどうしようと構わなかった。

そんなことよりも、輝実がショックで死んでしまいそうだ。

「胸がぜんぜん減ってない。それどころか、アンダーが痩せてバストアップしてる！」

良い爆乳です。

※※※

揺れちゃう爆乳。

どんよりとした空気を背負いながら、廊下をゆらゆらと歩く輝実。

クラスメートの女の子がやってきて抱きついてきた。

「おはよーっ、テルミン！」

むぎゅ。

後ろから抱きついたクラスメートは、輝実の爆乳をモミモミした。

「あれっ、テルミンまた胸大きくなった？　いいなあ、私貧乳だから分けて欲しいくらいだよ」

「ウキーッ！　ウキウキーウッキーッ！」

突然、輝実が奇声を発して歯を剥いた。

人間としての理性を失ったようだ。

そこへ、たまたま通りかかった裕和。

輝実と裕和の目が合った。

目の下に隈を作りながら、ハッとして硬直する輝実。

次の瞬間、自らの胸をわしづかみにして、両手で激しい乳搾りをはじめた。

「キーッ！　こんな胸、こんな胸、自分の手でもぎ取ってくれるわっ、うひひひひっ！」

あまりの奇行を目の当たりにして、裕和は輝実の体を取り押さえようとした。

「おいっ、なにやってるんだよバカ！」

「ヒロ君のためなの！　ヒロ君のために貧乳にならないといけないのーっ、そうしないとヒロ君に嫌われちゃうぅぅぅ〜〜〜っ！」

いや、こんな姿を見られたら普通は嫌われる。自爆だ。

白目を剥いた輝実が気を失った。

倒れそうになった輝実を慌てて裕和が支えた。

いつの間にか騒ぎは大きくなり、周りには生徒たちが集まっていた。

※※※

保健室のベッドで目を覚ました輝実。

「……きゃっ、ヒロ君！？」

目を覚ましたら王子様！

慌てて輝実はシーツをかき寄せて顔の下半分を隠して体育座りをした。

「どうしてヒロ……水谷君がいるの？」

「いちおう保健委員だし。目の前で倒れられたら運ぶだろ、普通」

輝実は壁に掛かっている時計を見上げた。１時間目の授業中はもうはじまっている。

「水谷君、授業は？」

「サボった」

「ダメだよサボっちゃ、私ひとりでも平気だから。お願いだから……出てって」

最後の声は消え入りそうなほど小さかった。

まともに裕和の顔を見られない。できれば顔を合わせたくなかった。

倒れる前のことは少しだけ覚えている。それだけに、輝実はもう裕和に合わせる顔がなかった。あの場にいた生徒、ウワサを聞いた生徒、もうこの学校にもいられないかもしれない。みんなに合わせる顔もない。

「なあ、ひとつ聞いていいか？」

少し顔を赤くしながら裕和が尋ねてきた。

「な、なんですか！？」

「オレのために貧乳にならないといけないってなに？」

「……。ぎゃ～っ！　忘れて、忘れてくださいお願いします。もう終わったことだから、だってだって……もう嫌われちゃったから！！」

ベッドに顔を埋めて輝実は鼻を啜りながら声を殺した。

ちなみにその体勢だと、ネコのポーズでパンツ丸見えだ。思いっきり裕和にお尻を突き出している体勢になっている。

「パンツ……見えてるぞ？」

「ぎゃ～っ、ごめんなさい！　もう私ったら……っ！？」

慌てて立ち上がろうとした輝実の足がもつれた。

裕和の目の前に迫る爆乳。

ふにゅ！

顔が埋まった。

……。

お互い顔を真っ赤にしたまま動かない。

そして、しばらくして胸の谷間からくぐもった声が聞こえてきた。

「く、苦しい……」

「ぎゃ～っ、ごめんなさい！　もう死にたい、早くこの世界から消えてしまいたい！」

顔を太陽よりも真っ赤に燃やした輝実は、慌てて裕和から離れて、ベッドの間の仕切りごと倒れた。

保健室に響く豪快な音。

仕切りは倒れたが、輝実のその体はしっかりと裕和の腕の中に抱かれていた。

鼻と鼻がぶつかりそうな距離で目を合わせる二人。

輝実はゆっくりと瞳を閉じて、唇を少し上げた。

パチン！

デコピンをされた輝実。

「いたっ！」

目を開けると裕和が意地悪そうに笑っていた。

「ばーか、なにその気になってんだよ」

言われて輝実は顔を真っ赤にして呆然とした。

そして、裕和は保健室を出て行こうとしていた。

「その髪型も好きだぜ」

裕和が保健室を飛び出していった。輝実からは見えなかったが、裕和の顔は輝実よりも真っ赤だった。

おしまい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6130j/

テルミンのバストダウン大苦戦！

2010年10月17日12時08分発行